

巧みな映像で描き出す 一途な恋心

『初恋のきた道』

2000年、米＝中国映画、89分

監督／チャン・イーモウ

出演／チャン・ツイイー、スン・ホンレイ

DVD／ソニー・ピクチャーズ・エンタテインメント



初恋とその成就、ただそれだけを描くことに集中し、サイド・ストーリーをいっさい付け加えなかったという意味で、その単純さは映画史上希有に近いかも。余分を徹底してそぎ落としたことが、すばらしい効果をあげた。

モノクロの画面で始まる。40年間小学校の教師を務めた父親が死んだとの知らせを受けて、一人息子が都会から郷里に帰ってくる。そこには悲嘆にくれる母親がいた。40年間、毎日、夫の教える村の学校に通い詰め、その「素敵な授業の声」を聞き続けた。それほど母は父を愛していたのだ。

叙情的なBGMに合わせて息子が父と母の初恋を語り始めると、画面はカラーに変わる。目を見張る鮮やか色だ。チャン・ツイイーの美しさを、カメラはいわば臆面もなく追い続ける。しかもクローズアップを繰り返す。ピンクの服、黒い髪、緑のリボン、そして赤いピン留め。彼女が紅葉した山を背景に走る姿を、望遠レンズのカメラがスローモーションで捉える。他には目もくれない。恋心で心おどる少女の姿を見続けるだけで、観客は、この映画を堪能できる。映画的陶醉感とはこんなのを言うのか。彼女の恋心を阻むものなど何も描こうとしない。劇的葛藤をつくり出すための小細工をあえて持ち込まない。

チャン・イーモウ監督はカメラマンから転身しただけに色彩感覚は鋭いが、『紅いコーリャン』にしても『菊豆』『秋菊の物語』も重厚なドラマであったし、政治も背景に流れていた。抗日といったサブテーマを含むものもあった。その彼が、初恋一点にしぼり、女性が生涯をかけて貫いた愛の物語を、心優しい目で描いていくのである。

父と母との愛が実る。すでに文化大革命期だというのに、村ではじめての恋愛結婚が成立したのだ。だが、彼らの愛

の日は描かれない。画面は現代となってモノクロに戻り、息子が父親の葬式をとりおこなう。教え子たちが葬儀にかけつけ、村人たちの心の支えだった先生への感謝と哀悼の意を表す。カラーから一転したのち約20分、クローズアップは皆無となる。あれほどチャン・ツイイーの些細な喜怒哀楽を丁寧に追ったカメラは、もはや人々の表情などに目もくれようとはせずに淡々とリアリズム調で、息子が見た父亡きあとの母の姿と村の様子を見つめることになる。ここにも映画作家としての信条が貫かれている。見る者は改めて彼女の鮮やかな大写しの表情を、モノクロ画面の裏側に思い浮かべることになる。

単純明快で誰にでも分かりすぎるほどだが、愛の本質と、その気高さを通じて、人間が生きることの尊厳を描ききっているように思える。この単純さは、複雑怪奇とも言える物語を執拗に編み出しテンポを限りなく早めていく現代流、とりわけハリウッド映画への挑戦とも受け取れる。チャン・ツイイーは、この映画の素朴な美しさにはもう戻れないのではないか。オードリー・ヘプバーンが『ローマの休日』のあの至上の清楚さを、以後凌駕しえなかったのと同じだろう。私のもっとも好きな中国映画の一つ、少なくとも何度も繰り返し見たい大らかな人間讃歌である。愛の勝利に心を打たれたのである。

プロフィール

吉村 英夫（よしむら ひでお）

1940年生まれ。映画評論家、愛知淑徳大学教授。早稲田大学卒業後、三重県立高等学校で教鞭を執る。34年の教員生活を経て退職、現在に至る。著書に『完全版男はつらいよの世界』『老いてこそわかる映画』などがある。近刊に『吉村英夫講義録 チャップリンを観る—そして「ローマの休日」へ』